

令和元年6月6日現在

機関番号：30106

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13073

研究課題名(和文)アティピカル・インタラクションのエスノメソドロジー障害と相互行為の研究

研究課題名(英文)Ethnomethodological studies of atypical interaction: disability and interaction study

研究代表者

水川 喜文(Mizukawa, Yoshifumi)

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：20299738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「アティピカル・インタラクション(atypical interaction)」すなわち「コミュニケーションに関する障害のある人を含む相互行為」の研究に関して総括的考察と、社会学の方法論であるエスノメソドロジー・会話分析、特にウィットゲンシュタイン派エスノメソドロジーの立場からの考察と分析を行った。本研究の成果としては、(1)アティピカル・インタラクションが含まれるデータを分析した国際学会での研究発表(2015-2018)、(2)アティピカル・インタラクション研究の成果と関連させた精神障害、視覚障害、難病の人などへの現場調査、およびそのデータ収集と分析・考察である(2016-2018)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、会話分析や相互行為分析という分析法を用いて、アティピカル・インタラクション(atypical interaction) = 「コミュニケーションに関する障害のある人を含む相互行為」という未開拓の領域に対して方法論的研究、応用研究を行ったという学術的意義、その相互行為に対する新たな視点や可能性を提案して、障害や難病によるコミュニケーション障害に関する実践に結びつけるという社会的意義を持つと考えている。

研究成果の概要(英文)：In this research, we analyze atypical interaction, social interactions involving participants with communication impairment, using Wittgensteinian ethnomethodology and conversation analysis. Our study explicates that the "Kuchi-moji (ban)" method, the special communication method without speech, of assisted social interaction is a collaborative effort between the ALS individual and his/her assistants(2015, 2016). The findings suggest that these interactions are on shared "methodical knowledge" based on their everyday life. We also focus on the instruction(2017, 2018) on how to use an eye tracking PC for people with communication difficulties and explores how membership categories and shared knowledge work in three-body interaction settings. In addition, some of the consequences from our atypical interaction studies are applied to the phenomenon of social order, such as languages use in "tojisha kenkyu" sessions (a group therapy session) for people with mental illness(2016, 2018).

研究分野：社会学

キーワード：エスノメソドロジー 会話分析 アティピカル・インタラクション 医療的ケア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始時において「アティピカル・インタラクション(atypical interaction)」という領域がエスノメソドロロジー・会話分析の関連研究として注目されていた。このアティピカル・インタラクションとは、コミュニケーションに障害(impairment)のある人が含まれる相互行為(interaction)ことを指す。

(2) この領域に関して、2013年にはシェフィールド大学で国際学会が開催されるなど、会話分析やエスノメソドロロジー研究において、それらをアティピカル・インタラクションという領域として統合的、実践的に研究されることが期待されている。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、近年、研究萌芽期にある「アティピカル・インタラクション(atypical interaction)」=「コミュニケーションに関する障害のある人を含む相互行為」の研究に関する、総括的論考及びウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの立場からの方法論的な問い直し、再構築を目的とする。

(2) この研究領域において研究代表者と分担者が行った医療的ケアを受ける ALS 当事者、当事者研究を行う精神障害者等のフィールドワークの経験などをもとに、そこでの社会的実践を録音・録画データに基づいて考察し「アティピカル・インタラクション」の研究をエスノメソドロロジー視点から構築することで、障害当事者を含む相互行為の「実践の論理」を明らかにすることを目的とする

3. 研究の方法

(1) 第一に、アティピカル・インタラクションの研究に関する総括を行なうために、包括的な文献研究を進めるとともに、国内外の関連研究者との情報交換を行なうことで方法論的な考察を進めた。関連する文献研究を基盤とし、エスノメソドロロジー・会話分析国際学会(2015)の「アティピカル・インタラクション」セッションや、アティピカル・インタラクション国際学会(2016)など研究発表を行うと同時に関連する情報交換を行い研究の現状を把握した。

(2) 第二に、会話分析だけではなく、成員カテゴリーや論理文法などの発想を使い具体的実践を分析するため、これまでの関連データの整理及び、フィールド開拓とデータの取得を行なった。これまで関係を築いてきた医療的ケアを利用する ALS の人(日本および北海道 ALS 協会を含む)や、より広く視覚障害、精神障害に関する様々な実践についてのフィールドワークに基礎とした具体的データを元にした研究を進めた。

4. 研究成果

本研究では、アティピカル・インタラクションの研究として、エスノメソドロロジー・会話分析(EMCA)の方法、特にウィトゲンシュタインなど言語実践に関する発想を用いて行うことを提起した。その中で、(1) EMCA によるアティピカル・インタラクション研究の現状の総括と課題の提起、(2) 先行研究では言及が限定的だった、エスノメソドロロジー的研究としての成員カテゴリー、ローカルな秩序、共同作業実践に関して、ALS の人を含む相互行為の分析を行った。また、(3) アティピカル・インタラクション研究に触発されたものとして、ローカルな秩序や当事者などの概念についての研究も、本研究ではすすめた。以下にその成果を概略する。

(1) EMCA によるアティピカル・インタラクション研究の現状の総括と課題について。

本項に関しては、「アティピカル・インタラクションのエスノメソドロロジー/会話分析の展開: ALS の人による口文字コミュニケーションから」(水川 2016)において次のようにまとめられた。ウィルキンソン(2008)が述べる通り、会話分析によるコミュニケーション障害の研究は、「自然に生起する相互行為」を「リアルタイムで」分析する手法として有効である。研究対象としては、後天性コミュニケーション障害(失語症、認知症・脳外傷)、発達性コミュニケーション障害(自閉症・発達性言語障害、吃音)、AAC(拡大代替コミュニケーション)と言語障害などがあり、言語聴覚士などにより実践的に成果が活用されている。

また、これまでのアティピカル・インタラクションの研究は、参与者の相互行為上の遂行上の秩序性、特に、発話の順番(turn)とシークエンスの相互行為分析として研究がすすめられたことも指摘できる。例えば、相互行為上のトラブルの参与者による解消(Acton 2004 による吃音研究)、修復の相互行為的達成(自己選択修復、他者選択自己修復、他者選択他者修復)(Lock, Wilson & Bryan 2001 の失語症研究など)、対話者(重要な他者)の寄与によるトラブルの解消(Goodwin 1995 の失語症研究)などである。これらの研究によって、言語機能の障害が相互行為の阻害となるばかりではなく、さまざまな相互行為的な方策の遂行によりスムーズな遂行、自然な相互行為となる可能性を示すと共に、臨床的介入の方法論も示されてきた。

(2) エスノメソドロロジー的研究としての成員カテゴリー、ローカルな秩序、共同作業実践という発想をアティピカル・インタラクション研究に適用することに関して。

本研究では、ALS の人が「口文字」を使ってコミュニケーションする場面を中心に、アティピカル・インタラクションにおける成員カテゴリー、ローカルな秩序、共同作業実践などについて考察した。本研究における協力者である ASL の人は、気管切開をして人工呼吸器を利用しながら在宅で介助者と共に生活をしている。コミュニケーションは、「口文字」という文字盤から発想された口唇とマバタキを用いた方法をとっている（当事者が開発した伝達法）。

まず、水川(2015)、International Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis Conference, University of Southern Denmark の "Kuchi-moji (ban)' and assisted social interaction of persons with ALS: Shared knowledge and collaborative work of the persons and their assistants" では、口文字によるコミュニケーションの際の介助者の修復場面について考察した。その結果、修復がなされるには、修復対象の共同理解から始まり、共有知を基本とした実践的な推論を行うことで、修復が成し遂げられることがわかった。それには、障害者の自立生活における共同の生活世界というものが基礎となっており、その生活世界の共有知識をもとに相互行為がなされていることが示された。

University of Southern Denmark, Odense（南デンマーク大学・オーデンセ）で行われた Atypical Interaction Conference（アティピカル・インタラクション国際学会, 2016）では水川により "Collaborative work and shared /asymmetrical knowledge in "Kuchi-moji (ban)": Assisted social interaction of persons with ALS and their assistants" という発表が行われた。

ここでは、ALS の人がパーソナルコンピュータの視線入力を導入する場面と、上記の日常場面の 2 つを分析した。前者では、口文字コミュニケーションにおける非対称的知識の構造があり、<インストラクションのシークエンス（専門家 - 素人）> と <口文字のシークエンス（当事者 - 介助者 - 対話者）> というシークエンスがあることが示された。さらに、2 つの成員カテゴリーとシークエンスの相互行為の進行に応じた結びつきにより、口文字コミュニケーションが円滑に遂行され、これにより、口文字独自のコミュニケーション方法、論理が明らかになった。これは、「言語としての口文字」という、衆院厚生労働委員会における岡部宏生・日本 ALS 協会会長の参考人質疑における発言とも呼応するものである。後者では、共有された非対称的な「方法的知識」(shared/asymmetrical "methodical knowledge") によって、障害者の自立生活による介助の熟達 (mastery of assistance) がなされていることが示された。これらの分析過程において、語や文の省略や情報の追加、非対称的カテゴリーに結びついた共有された / 非対称的知識、マルチモーダルにおける理解のレディネス、トラブルの理解と修復、誤解の共同的理解などについても指摘した。

Otterbein University（アメリカ、オハイオ州）で行われた International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis Conference 2017（エスノメソドロジー・会話分析国際会議・大会）における "Asymmetrically organized order of instructions on the use of an eye-tracking PC for people with communication difficulties" では、ALS の人がコンピュータに視線入力を導入する場面を中心に、インストラクション（教示）についての考察を行った。その結果、当事者、介助者、インストラクターという成員カテゴリーと、それに結びついた活動が、インストラクションという実践の中で遂行されていることが明らかになった。それは、インストラクションという対になる活動 (paired action) であると同時に、3 者による行為連鎖という両面があるということ、シークエンス上の教示された行為が、非対称的に組織されたインストラクションと共になされることによって、理解可能な行為となっていることが示された。

国際会話分析学会 (5th International Conference on Conversation Analysis) の水川 (2018) では、ALS の人が、上記と同様のアシスティブ・テクノロジーを使った視線入力を導入場面で、いかにしてアドホック（その場の）実践を行っているかを、成員カテゴリー、相互行為のシークエンスに注目し、アティピカル・インタラクションの成果を考慮に入れて分析を行った。その結果、教示が達成される、つまり視線入力方法が ALS の人によって理解されたということが共同理解となるには、たんに教示通りに入力になされたことだけではなく、むしろ、教示に従わず、創造的に入力をこなすことによって示されるということを示した。つまり、インストラクションに従わないこと (not following) が、かえってインストラクションを「良く」従っている ("good" following) になっていることであり、アドホックな実践の重要性について指摘した。

(3) アティピカル・インタラクション研究に触発されたものとして、ローカルな秩序や当事者などの概念についての研究について。

上記のアティピカル・インタラクション研究における、成員カテゴリー、ローカルな秩序、共同作業実践に関する研究成果と関連させることで、次のような研究も進めることができた。Mizukawa, Yoshifumi and Shigeru Urano, Kazuo Nakamura による "Membership categorization and sequential use of language in Tojisha Kenkyu (or self-directed research) sessions for mental health" (5th International Pragmatics Conference, Belfast)、そして、International Pragmatics Association Conference（国際語用論学会大会, 2017）では、精神障害者の当事者研究におけるコミュニケーションの共同発表 "Membership categorization and sequential use of language in Tojisha Kenkyu (or self-directed research) sessions for

mental health"がある。これは、アティピカル・インタラクションで注目した、成員カテゴリーとシークエンスの関係について、当事者研究に結びつけて研究したものである。また、アティピカル・インタラクションやウィトゲンシュタインの論理文法分析/概念分析に関連して、視覚障害者の歩行訓練における習得プロセスの研究(吉村・秋谷ほか 2016)や精神障害者などについての当事者研究(浦野 2016、浦野 2017、中村・浦野・水川 2018)における相互行為の研究も行った。これらには、「行為の理解可能性」を含むさまざまな実践におけるカテゴリー使用、概念使用、ローカルな秩序といったより根源的な問題についての言及を行った。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

中村和生・浦野茂・水川喜文、当事者研究におけるファシリテーター・当事者の実践、保健医療社会学論集、28(2): 65-75、2018

秋谷直矩、人びとの実践における『行為の理解可能性の公的な基準』の探求、看護研究、50: 330-334、2017

浦野茂、言いつばなし聞きつばなしのエスノメソドロジー、みんなの当事者研究(臨床心理学増刊) 9: 197-199、2017

喜多加美代・浦野茂、実践の記述としての「当事者」の概念分析、社会学年報、46 ページ : 3-15、2017

吉村雅樹・秋谷直矩・佐藤貴宣、歩行訓練における地図の習得プロセス：視覚障害者歩行訓練のエスノメソドロジー、ソシオロギス、40: 133-155、2016

浦野茂、当事者研究の社会的秩序について：経験の共同研究実践のエスノメソドロジーに向けて、保健医療社会学、27: 18-27、2016

西澤弘行・南保輔・坂井田瑠衣・佐藤貴宣・秋谷直矩・吉村雅樹、視覚障害者と歩行訓練士の相互行為の中の触覚についての覚書、現象と秩序、5: 15-32、2016

西澤弘行・南保輔・秋谷直矩・坂井田瑠衣、『今、ここ』を引き延ばすこと：歩行訓練における環境構造化実践の相互行為分析、常磐大学大学院学術論究、3: 25-43、2016

〔学会発表〕(計 9 件)

南保輔・西澤弘行・坂井田瑠衣・佐藤貴宣・秋谷直矩・吉村雅樹、視覚障害者の「知覚」を焦点とする情報授受：歩行訓練場面における触覚と「これ」の組み合わせ使用、2018 年度エスノメソドロジー・会話分析研究会秋の研究大会(日本女子大学)、2018

Mizukawa, Yoshifumi, Ad hoc practice in atypical interaction: Not following instruction in the eye-tracking PC, 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会), 2018

Mizukawa, Yoshifumi and Shigeru Urano, Kazuo Nakamura, Membership categorization and sequential use of language in Tojisha Kenkyu (or self-directed research) sessions for mental health, 5th International Pragmatics Conference, Belfast, Northern Ireland, UK, 2017 年 7 月

Mizukawa, Yoshifumi, Asymmetrically organized order of instructions on the use of an eye-tracking PC for people with communication difficulties, International Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis Conference, Otterveing University, Westerville, Ohio, USA, 2017 年 7 月

水川喜文、IEMCA とエスノメソドロジー・会話分析の展開、エスノメソドロジー・会話分析研究会、2017 年 10 月

水川喜文、アティピカル・インタラクションのエスノメソドロジー/会話分析の展開：ALS の人による口文字コミュニケーションから、日本社会学会、九州大学、2016 年 10 月

Mizukawa, Yoshifumi; Urano, Shigeru; Nakamura, Kazuo, Tojisha/Peer Membership Categories

and Sequential Order in Tojisha Kenkyu Sessions for People with Mental Illness,
International Sociology Association Forum 2016、Wien University、2016年7月

Mizukawa, Yoshifumi、Collaborative work and shared/asymmetrical knowledge in "Kuchi-moji
(ban)": Assisted social interaction of persons with ALS and their assistants、Atypical
Interaction Conference 2016、University of Southern Denmark, Odense、2016年7月

Mizukawa, Yoshifumi、'Kuchi-moji (ban)' and assisted social interaction of persons with
ALS: Shared knowledge and collaborative work of the persons and their assistants,
International Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis Conference,
University of Southern Denmark, Kolding、2015年08月

〔図書〕(計 2件)

水川喜文(共著)、浦野茂(共著)、山崎敬一(編)、エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック、新曜社、(現行校了済、掲載頁未定、近刊)

浦野茂(共著)綾屋紗月(編)、ソーシャルマジョリティ研究、金子書房、2018

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：浦野 茂

ローマ字氏名：Urano, Shigeru

所属研究機関名：三重県立看護大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：80347830

研究分担者氏名：秋谷 直矩

ローマ字氏名：Akiya, Naonori

所属研究機関名：山口大学

部局名：国際総合科学部

職名：講師

研究者番号（8桁）：10589998

(2)研究協力者
該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。